



新学長、 森田ビジョンを語る。

継承と発展

岡山大学をこの地域における国際的な研究拠点にするという構想を継承した上で、具体化、発展させる。
大学と都市・地域が連繋した新たな「美しい学都」を目指す。

担い手の形成

伝統から学ぶ
真の国際化を目指す

活動の理念

大学人は地域の人々と連携し、地域の人々は世界の人々と連帯する。地域の自立に貢献する大学となるため、
地域の善き頭脳、地域のための優れた人材養成の場となり、知的に高度な地域サービスを提供する。
国際的なリージョナルセンターを持つ大学に押し上げ、そこから真に個性的な、
卓越した大学をつくり上げていく。岡山の地にあってこそ世界から人が集まり、世界に輝く大学に。

キャンパスの創造

美しい、気品あるキャンパスを創成する

大学のガバナンス

岡山大学にふさわしい組織構造と機能の構築
検証と評価
経営力の強化

伝統活かし、存在感を

Special Interview

4月1日、岡山大学の第13代学長に森田潔氏が就き、新体制がスタートした。就任に際して「森田ビジョン」を発表し、大学運営の方向性を明らかにした新学長にビジョンに沿って、決意を聞いた。



PROFILE	
1949年12月	倉敷市生まれ
1974年3月	岡山大学医学部卒
4月	岡山大学医学部附属病院麻酔科 入局
1993年7月	岡山大学医学部 助教授
2002年4月	岡山大学院歯医学総合研究科 教授
2005年6月	岡山大学医学部・歯学部附属病院長（現・岡山大病院長）
2011年4月	国立大学法人岡山大学学長

—学長の目指す理想の大学像とは、どのようなものか。

ヨーロッパの大学は長い歴史を持ち、都市の中で大きな存在感を示しているが、岡山大学は岡山市、岡山県の中で存在感を示し切れていない。岡山大学も140年以上の歴史を持つている。その歴史と伝統を活かし、地域の中で存在感を示したい。

ある立派な卒業生が岡山大学出身であるということを感じていて聞いてショックだった。市民や県民のみならずが自慢に思う大学にしていきたい。

—岡山大学は多くの留学生を受け入れ、若手研究者を海外に派遣している。学長の考える真の国際化した大学とは。

これは森田ビジョンの一つの大きな柱。岡山大学が本場に国際化しているかといえば、まだまだ地方の大学に甘んじていると思っている。岡山の地にあつて、国際的な大学にしたい。国際

的な大学ランキングも上げたい。数値目標としては世界で250位、国内ではトップ10に入りたい。

そのためにまず、人の動きを活発にする。教授クラスの人を1〜3カ月くらい海外に派遣するようなシステムをつくり、指導者にも動いてもらう。岡山大学に来てもらうためには、こちらから行くことだ。

—森田ビジョンは、地域という言葉がキーワードになっている。地域を大事にすること、国際化というのは相反するイメージがあるが。

私自身も経験から地方の不利は感じている。だが、それを逆手に取って国際化を進めたい。岡山大学は、都市部の真ん中にこれだけ広大なキャンパスを持ち、京阪神へのアクセスも良いという地の利がある。何よりも、岡山大学が岡山にある限り、地域の人たちと私たちが一緒にやることで世界の大学に近づく。それにはやはり、市民のために働くことが大事。地域との

連携組織をつくり、互いに何が必要か、何を求めているかを意見交換し、結びつきを強めていきたい。

—キャンパスの創成について、学長の思い描く美しいキャンパスとは。

大学の本質は教育と研究だが、やはり人に集まってもらおうと思えば、そこに立った時にすがすがしく、気持ちがいいキャンパスであることが必要。そこには、人が存在している、人間味のある美しさも欠かせない。きれいになれば、岡山大学が変わったと目で見て分かる。キャンパスは市民にもオープンにし、皆さんが誇りに思える大学にするのが私の夢だ。プロのアイデアを聞きながらグラウンドデザインをつくり、キャンパス整備に取り組みたい。構想の段階だが、街中にキャンパスをと考えている。市街地の商店街にでも、学生が気軽に立ち寄り、市民向けの講義をし、大学の情報を発信するような場所をつくりたいと思っている。

—岡山大学は津島キャンパスと鹿田キャンパスに分かれている。一体感を増すには、名称を変更するという案もあるが。

津島地区と鹿田地区は別々の大学というイメージがあるのも確か。そのイ

きない。学部と研究科それぞれの存在意義を明確にした上で、学部にも裁量権を与えていきたい。それぞれがアイデンティティをしっかり持てば学部を超えた共同研究もしやすくなる。そうなれば、岡山大学の特徴である総合大学院方式もより生きてくると考える。

メージをなくし、互いに連帯感を抱けるように、キャンパス名を変えてもいいと思っている。意識改革になると思う。

—組織機能を発揮するためミドルアツプミドルダウンを掲げるが、具体的にはどういうことか。

これだけの巨大な組織を活性化していくには、学長のリーダーシップや理事の能力だけでは、限界がある。実際のアクティビティは各部署だと思つて。各部署の長に、いかに責任を持たせられるかだ。部局と執行部がうまく意思疎通してコントロールするのが一番いい方法だと思つた。

学長になって驚いたが、学部長の裁量経費はほとんどないに等しい。これでは教育を担う学部が大きな仕事を

—理系と文系を同一に評価するのは難しい。検証と評価のあり方についてはどう考えるか。

評価は目的ではなく、単なる手段。大学は多様な人の集まりで、一律に評価することは不可能だ。だが、そうは言っても部局に裁量権を与える限りは評価がある。理系、文系がある総合大学にふさわしい評価システムに進化させたい。多様性を持ち、期間も柔軟にした新しい評価が必要だろう。

ビジョンに掲げた目標を実現することが岡山大学の魅力を実現することだ。大学づくりも町づくりも5年、10年では成し得ない。50年規模だろう。ビジョンはその第一歩。大学が変わっていくきっかけにしたいと思う。

森田学長ってこんな人！

「人見知りで、ほとんど怒ったこともない。リーダーとしては調整型でしょうね」と自己分析する。中学、高校、大学とテニス部に所属し、「高校、大学時代はとにかくテニスに明け暮れた。女の子に、よくもてましたよ」。最近の息抜きは休日の庭の手入れ。「草むしりをしていると無心になれる。きれいになると達成感があります」と笑う。学長就任後も日本麻酔科学会理事長など学外の要職を兼任。「医師は自分の原点。生涯ひとりの医師であり続けたい」といい、出勤前に岡山大病院へ立ち寄るのを日課にしている。

50年後の岡山大学創造

Interviewer

聞き手
編集長 後藤 邦彰（工学部教授）
副編集長 林 創（教育学部准教授）